

<実践報告>

医療看護系大学生のための文化人類学の授業実践報告
 -学校保健活動と感染症の事例-

阿久津昌三 信州大学学術研究院教育学系

上野真理恵 信州大学大学院総合人文社会科学研究所

A Report on the Lessons of Cultural Anthropology for Health,
 Medical and Nursing Students
 -Case Studies of the School Health Activity and Infectious Diseases-

AKUTSU Shozo: Institute of Education, Shinshu University
 UENO Marie: Graduate School of Humanities and
 Social Sciences, Shinshu University

研究の目的	本報告は、医療看護系大学生のための文化人類学の授業を開発し、2021年度前期に長野保健医療大学保健科学部及び看護学部にも所属する学生を対象に行なった授業実践を報告することである。
キーワード	学校保健 感染症 手洗い 身体技法 しぐさ
実践の目的	医療看護系大学生のための文化人類学の授業実践のカリキュラム開発
実践者名	阿久津昌三・上野真理恵
対象者	長野保健医療大学保健科学部及び看護学部1年生
実践期間	2021年前期
実践研究の方法と経過	<ul style="list-style-type: none"> ・授業概要のガイダンス ・授業計画と授業内容 ・JICA 海外協力隊の活動内容/活動報告 ・感染症と手洗い運動 ・授業後の学生の感想
実践から得られた知見・提言	<p>本授業では、JICA 海外協力隊でガーナの学校保健活動に従事した講師を招聘して、ガーナを専門とする文化人類学者との連携体制をとることで学校保健活動と感染症をテーマに授業を展開した。</p> <p>本報告は、医療看護系大学生のための文化人類学の授業実践の事例となるものである。</p>

1. はじめに

平成 28 年度版改訂版「医学教育モデル・コア・カリキュラム」が公表された。特に、「B-4 医療に関連のある社会科学領域」の「B-4-1) 医師にもとめられる社会性」という項目において、「ねらい」と「学修目標」に分けて文化人類学に関する事項が記述された。

「ねらい」には「文化的社会的文脈のなかで人の心と社会の仕組みを理解するための基礎的な知識と考え方及びリベラルアーツを学ぶ。臨床実践に行動科学・社会科学の知見を生かすことができるよう、健康・病い・医療に関する文化人類学・社会学(主に医療人類学・医療社会学)の視点・方法・理論について、理解を深める」と記述された。

また、医学教育モデル・コア・カリキュラムに続いて、2017 年 10 月には「看護学教育モデル・コア・カリキュラム」が公表された。

本報告は、これらの「医学教育/看護学モデル・コア・カリキュラム」を参照しながら、医療看護系大学生のための文化人類学の授業を開発し、2021 年度前期に長野保健医療大学保健科学部及び看護学部にも所属する学生を対象に行なった授業実践を報告することである。なお、受講生は、保健科学部リハビリテーション学科(理学療法専攻 21 名、作業療法専攻 30 名)、看護学部看護学科 66 名であった。これらの学生は、将来、JICA 海外協力隊の活動分野では、計画・行政、人的資源、保健・医療、社会福祉の分野で活動できる可能性がある。本授業では、学校保健活動と感染症をトピックにした。

2. 医療看護系大学生のための文化人類学

2.1 授業計画と授業内容

授業目標は「文化人類学は、自己と他者、自文化と他文化との差異を探求しながら、エスノセントリズムの発想を脱して、自文化と他文化を理解しようとする学問である。本講義では、人間と文化、人と人とのつながり(生殖、家族、親族、結婚)、人生と通過儀礼、宗教と世界観、健康と医療、いのちと文化について学ぶ」とした。

また、学習目標は、「①フィールドワークの方法を学び、人々の話を聞き、行動を観察しながら記録し、医療にかかわるバックグラウンドとなる文化とは何かを知る、②ローカルな/グローバルな医療活動に携わるときに必要な文化人類学の知の技法を学ぶ、③医療を多様な角度からとらえなおす医療人類学の最前線を学ぶ」とした。

授業内容は、第 1 週「文化人類学と看護学」、第 2 週「家族①—家族概念と家族関係語彙」、第 3 週「家族②—生殖と親子」、第 4 週「家族③—結婚と親族」、第 5 週「ジェンダーとセクシュアリティ」、第 6 週「生業経済の諸類型—採集・狩猟、農耕、牧畜」、第 7 週「コミュニティとアソシエーション」、第 8 週「民族と国家」、第 9 週「民族と紛争」、第 10 週「人生と通過儀礼①—通過儀礼と境界理論」、第 11 週「人生と通過儀礼②—儀礼の構造と理論」、第 12 週「宗教とコスモロジー①—呪術、宗教、科学」、第 13 週「宗教とコスモロジー②—憑依とトランス状態」、第 14 週「医療人類学①—病いと治療」、第 15 週「医療人類学②—生と死と再生」である。

なお、本授業では、波平恵美子編『文化人類学 カレッジ版』（医学書院 2021）（第 4 版 第 1 刷）の教科書を使用した（執筆陣は、波平恵美子、小田博志、仲川裕里、浜本まり子、森田久仁子、道信良子である）。本書は、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）のパンデミックを受けて、大幅に改訂されたことが特徴である。波平恵美子は「新型コロナウイルス感染症のパンデミックのさなかに現れ、そしてその終息後に現れるであろう、人間の『文化』の重要な要素を揺るがしかねない大きな変化の研究」を文化人類学の課題と位置づけながら、次のように述べている。

「感染予防に採られた最も基本的で重要な予防手段は、＜自分以外の人との接触を極力さける＞というものである。生命を感染の危険から守るために、人間が人間であるうえで最も重要な、身体接触を含む人間関係を、一時的であれ、根底から否定することが強調される。また、感染の初期から次第に顕わになってきた、国内、国家間、地域間の格差がある。人の生命が直接関わるがゆえに、感染予防と治療や救命における格差は、強い感情を伴う。このパンデミックのさなかに、そして終息後の世界を、文化人類学は、痛みを伴いながらも、研究対象にする義務があるだろう」（波平 2021:1-2）。

本年度の授業では、新型コロナウイルス感染症のパンデミックのなかで大幅に改訂された内容から授業を展開した。具体的には、「『コロナ後』の世界を想像／創造するために」（新型コロナウイルス感染症とエスノグラフィー、これまでとは違う世界を想像／創造する）、「環境グローバル化がもたらす健康リスク」（パンデミック・インフルエンザ A (H1N1)、複雑で深刻になる健康課題、これからの人間社会）をとりあげた。

これらの経緯もあって、本年度の授業では、西アフリカのガーナ共和国において JICA 海外協力隊で保健・医療分野（特に、学校保健活動）の経験がある上野真理恵さんを招聘した。上野さんは、地方の公立小学校において学校保健活動に従事した経験がある。

また、感染症のなかでも、西アフリカのエボラウイルス病の感染拡大の事例をとりあげて、家族と親族、冠婚葬祭（特に、葬儀）、呪術など人類学的なテーマをとりあげた。

2.2 JICA 海外協力隊の活動内容

JICA 海外協力隊とは、開発途上諸国からの要請に基づき、青年海外協力隊等として派遣され、開発途上諸国の経済・社会の発展／復興への寄与、異文化社会における相互理解の深化と共生、ボランティア経験の社会還元を主な目的としている。

これまでに派遣された JICA 海外協力隊員数は累計 53,844 人であり、派遣国は 97 か国におよぶ。地域別では、アフリカ地域 15,320 人、アジア地域 15,431 人、北米中南米地域 14,172 人、大洋州 4,660 人、中東地域 3,588 人、欧州地域 703 人となっている（2019 年 8 月 31 日現在）（JICA 海外協力隊 2019）。

また、活動分野は、計画・行政、農林水産、鉱工業、人的資源、保健・医療、社会福祉、商業・観光、公共・公益授業、エネルギーという 9 つの分野に大別され、190 以上の職種があるという。なお、活動分野別の割合は、人的資源 39%、農林・水産 14%、保健・医療 14%、計画・行政 11%、鉱工業 10%、その他 12%となっている（2015 年 5 月末現在、教

育出版 2016).

小学校、中学校の地理や公民の教科書にはかならずと言ってもよいほどに JICA 海外協力隊（青年海外協力隊）の海外での活動が写真入りで紹介されている。

①「日本もアフリカの自立への援助を行っています。政府は、学校や病院の建設、道路や水道、電気などの整備、稲作技術の向上などに対して資金や技術の援助を行っています」（東京書籍 2016a）。

②「稲作を指導する日本の青年海外協力隊（ウガンダ） 病気や乾燥に強く、収穫までの期間が短い、アフリカの風土に適した品種の稲がつくられています」（帝国書院 2016）。

③「青年海外協力隊による技術援助（南アフリカ共和国，2013 年） 新興国の発展を支える技術者を育てる 青年海外協力隊は日本の ODA の一つで、教育や保健、農村開発などさまざまな分野で途上国にボランティアを派遣しています。私は、工業高校で学んだ知識や自動車部品メーカーでの勤務経験を生かして、南アフリカ共和国の職業訓練校で 2 年間、電気機器について教えました。機材や教師が不足する厳しい環境でしたが、生徒の興味を引き出すために授業に実習を導入し、こわれた機材を修理して実習に再利用したり、現地の先生の実習方法を教えたりして、学習環境を整えました。一生懸命学ぶ生徒の姿に、自分自身も刺激を受けました」（東京書籍 2016b）。

④「子どもたちに日本語を教える青年海外協力隊員（2012 年，セネガル） 青年海外協力隊は、日本政府による国際貢献の一つです。隊員は、自分のもっている知識や記述を生かして、派遣された国や地域で、さまざまな技術指導や教育などに従事します」（教育出版 2016）。

『小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 社会編』には「我が国の国際協力の様子」については、「教育、医療、農業などの分野で世界に貢献している事例の中から選択して取り上げること」と記載されている（文部科学省 2017a）。

また、『中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 社会編』でも「地球環境、資源・エネルギー、貧困などの課題の解決のために経済的、技術的な協力が大切であることを理解する」と記載されている。これは「政府開発援助(ODA)をはじめとする我が国の国際貢献を取り上げ、経済的、技術的な協力などが大切であることや、貧困の解消に向けての取り組みを行っていることなどを具体的に理解できるようにすること」とされている（文部科学省 2017b）。

JICA 駒ヶ根（駒ヶ根青年海外協力隊訓練所）では、開発教育（国際理解教育）支援事業というプログラムがある。長野県小・中学校、高等学校、大学の教育現場ではこのようなプログラム制度を利用して国際理解教育の教育実践をしている。特に、長野県保健医療大学の学生は将来 JICA 海外協力隊の活動分野では医療・看護、社会福祉などで活躍する可能性がある。

2.3 感染症

教科書のなかでは、アフリカというと人口増加、砂漠化、天候不順、食料不足、飢餓、

表 1 JICA 海外協力隊の活動分野

計画・行政 (国・地域づくりに関わる活動)
コミュニティ開発 環境行政 行政サービス コンピュータ技術 防災・災害対策 交通安全 など
農林水産 (食べ物や自然に関わる活動)
食用作物・稲作栽培 家畜飼育 野菜栽培 林業・森林保全 土壌肥料 養殖 など
鉱工業 (ものづくりに関わる活動)
溶接 電気・電子設備 自動車整備 陶磁器 建設機械 食品加工 など
人的資源 (教育やスポーツなど人を育てる活動)
青少年活動 体育/スポーツ各種 環境教育 小学校教育 PC インストラクター 家政・生活改善 など
保健・医療 (いのちに寄り添う活動)
看護師 助産師 理学療法士 公衆衛生 作業療法士 栄養士 養護教諭 など
社会福祉 (福祉に関わる活動)
ソーシャルワーカー 高齢者介護 障害児(者)支援 福祉用具 など
商業・観光 (マーケティングや観光に関わる活動)
経営管理 観光 など
公共・公益授業 (生活サービスに関わる活動)
水質検査 地震 建築 廃棄物処理 土木 など
エネルギー (エネルギーに関わる活動)
再生可能・省エネルギー 電力 など

(JICA 海外協力隊 2019)

病気、紛争、環境問題など課題だらけである。感染症についてはアフリカがとりあげられることが多い。

①「世界のほかの地域と比べてエイズを発症する人が多いことも、大きな課題です」(東京書籍 2016a)。

②「日本の企業が開発した防虫効果のある蚊帳を伝染病の防止に生かす取り組み(ブルキナファソ)蚊にさされることで伝染するマラリアという病気から、人々の命を守るために、国際協力機構(JICA)などと協力して行っています」(帝国書院 2016)。

③「日本企業が開発した防虫蚊帳と製造する工事(タンザニア)アフリカでは、蚊が媒介する感染症のマラリアで、毎年多くの死者が出ています。日本の大手化学メーカーS社は、防虫成分をせんに練りこんだ蚊帳を開発し、それを現地工場で生産し供給することで、マラリアの予防と現地の雇用創出に貢献しています」(東京書籍 2016b)。

④「2014年、西アフリカのギニア、リベリア、シエラレオネを中心に、きわめて致死率が高く、確立した治療法やワクチンのないエボラ出血熱が流行した。死者は 8,000 人をこえ、感染者は 2 万人に達した(2015 年 1 月)。また、そこでの感染者がアメリカやスペインに入学して死亡するなど、感染がさらに広がる危険が懸念された」(清水書院 2016)。

感染症については清水書院の『中学 公民 日本の社会と世界』（2016年）が大きくとりあげているのが目立っている。「地球的規模の問題」（新しい感染症，現代社会がかかえる地球的規模の問題，解決への取り組み）という特集で，エイズ，結核，マラリア，エボラ出血熱，スペイン風邪，SARS，はしかなどをとりあげている。

「1981年，それまで知られていなかった感染症エイズ（後天性免疫不全症候群）の患者が見つかった。2000～2003年には，当初病原体が知られていない『謎の肺炎』とよばれたSARS（重症急性呼吸器症候群）が東アジアで流行した。人びとの栄養状態，衛生管理，医学が向上した21世紀でも，新型ウイルスによる感染症がつぎつぎに流行している。このように短期間のうちに世界中に感染が広がり，多くの死者を出す感染症の大流行をパンデミックとよぶ。グローバル化とともに多くの人が移動し，これまで接したことがない病原体に接触する機会が増えている。また，感染症の病原体をもった大量の人や，鳥などの動物が，国境をこえて移動している。かぎられた地域に風土病をもたらしていた病原体が，国や地域をこえて広まる危険性も高まっている」（清水書院 2016）。

さらに，「現代世界では，感染症の病原体も，核兵器に関する情報も，また，地球温暖化などの問題も『遠い国のできごとだ』『一国内の問題で，他の国は無関係だ』と放置することのできない地球的規模の問題といえる。もし，国境をこえて感染症が大流行し，核が拡散していけば，地球上のだれもが災禍の犠牲者になる危険がある。日本人だけが，特定地域だけが，災禍からのがれることはできない」（清水書院 2016）と警告している。

3. ガーナの学校保健活動

3.1 学校保健の組織と目的

ガーナでは，国連児童基金（UNICEF）の支援により1992年からSchool Health Education Program（SHEP）が開始された。教育省には，学校保健局が設置されており，全国の教育事務所には，学校保健担当者が配置されている。学校保健担当者は，教育事務所が管轄する地域の幼稚園，小・中学校，高等学校等を巡回し，学校保健活動のモニタリング及び教員への指導，児童生徒への保健教育に取り組んでいる。各学校では，校長が学校保健を担当する教員を選出し，その教員が中心となって，学校保健活動を進めている。2004年には，JICAの技術協力（無償資金協力）のもと，ガーナの首都アクラに国際寄生虫対策西アフリカセンターが設立され，寄生虫対策に向けて学校保健のプログラムが強化された（国際寄生虫対策西アフリカセンタープロジェクト2004～2008年）。

SHEPの目的は，学校での保健教育や保健管理を通して，児童生徒が，健康に関する知識や健康的な生活を送るための実践的なスキルを身に着けることである。さらに，知識や実践的なスキルを習得した児童生徒が，家族や地域住民に伝えることで，周囲の大人たちの健康の保持増進を目指している。

3.2 地方での学校保健活動

(1) 住民の生活と健康課題

著者の任地は、グレートアクラ州ダンメースト郡の郡都アダ・フォアであった。アダ・フォアは首都アクラから東へ約 100km 進んだグレートアクラ州の東部にあたり、ボルタ川がギニア湾に合流する地域に位置している。

町の中心部では、水道や電気が整備されている家庭が多い。一方で、中心部から離れた沿岸部や島では、水道が通っておらず、生活用水には井戸や川の水を利用したり、家にトイレがないため、海や川で用を足したり等、衛生面で課題を抱える家庭が多い。さらに、川沿いの地域では、ヤギや豚等の家畜が放し飼いにされ、川沿いで排せつしているそばで、住民が川の水で食器洗いや洗濯、水浴びをする姿がみられる。このような環境は、地域住民の水系感染症の罹患のリスクを高めている。

アダ・フォアに設置されている郡のヘルスセンターの情報（2015～2017年）によると、住民の来院理由の多くは、マラリア、下痢、上気道感染症によるものである。マラリアは予防できる病気であり、様々な援助機関が、住民に対して蚊帳を配付している。しかし、実際には、住民は蚊帳を使用せずに外で寝たり、蚊帳を畑に活用したり等、感染症対策に関する意識には、個人差がみられる。

また、近年では、上記のような感染症の他に、非感染性疾患が増加してきている。その背景には、住民の生活習慣の変化が推察される。特に、食生活については、インスタント麺や清涼飲料水等の高カロリー食品を摂取する場面が頻繁に見受けられる。このような変化は、糖尿病や高血圧等の生活習慣病、むし歯の増加等を引き起こしている。

以上のように、地方の住民は、従来の感染症に加え、生活習慣の変化による非感染性疾患等の健康課題を抱えている。そして、これらの課題は、大人だけでなく子どもにも共通するものである。健康課題の解決に向けては、子どもの頃から、生涯にわたって健康的な生活を送るための知識や実践を身に着けることが求められている。

(2) 健康歌を通じた日常的な保健教育の推進

子どもたちの健康に関する知識の習得や、健康的な生活を実践する習慣の定着に対し、保健教育が果たす役割は大きい。しかしながら、ガーナでは、「保健」は単独の科目にはなっておらず、理科や宗教教育で健康に関する内容は取り上げられるものの、指導内容は限られている。また、学校教員や保護者自身も、保健教育を受けてきた経験が少ないため、学校や家庭における日常的な子どもへの教育が十分に実施されているとは言い難い。

そこで、様々な場面での健康に関する教育の機会を増やすことが重要だと考え、現地語（Dangme 語）での健康歌づくりに取り組んだ。歌にした理由は、ガーナでは、歌や踊りの文化が根付いており、普段の生活でも歌や踊りを楽しむ人々の姿がよくみられることから、取り入れられやすい教材であると考えたためである。歌のテーマは、住民の健康課題に関連するものとし、同僚や住民と一緒に、8曲（身の回りの清潔・手洗い・環境衛生・水衛生・マラリア予防・栄養・歯科・救急処置について）作成した。歌詞には、各テーマに関する具体的な知識を盛り込み、歌を通して知識が身につけられるように工夫した。

最終的には、出来上がった健康歌を集め、歌集として製本し、各学校に配布しながら、

児童生徒に対する保健教育と教員への指導を行った。各学校では、朝の集会等で健康歌を活用した保健教育を実施し、全校生で合唱する等の取り組みがみられた。また、ある学校では、健康歌集を現地語の音読の教材に使用する等の工夫がみられた。さらに、健康歌は、ラジオ局で定期的に放送し、地域住民にも広まっていった。

健康に関する歌を歌うことが、直接的に健康課題を解決するわけではないものの、日常生活に根付いた保健教育を推進していくことが重要である。その際に、地域の文化に馴染んだ活用しやすい教材を開発することも必要であると考える。

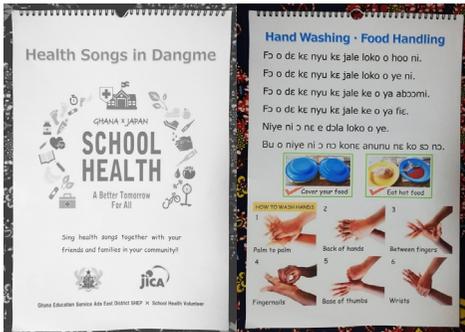


写真1 作成した Dangme 語の健康歌集



写真2 教材として使用している様子

4. 西アフリカのエボラウイルス病の感染拡大

4.1 ギニア、リベリア、シエラレオネのエボラウイルス病

本年度の授業では、2014年から2016年にかけて、西アフリカのギニア、リベリア、シエラレオネ、そしてナイジェリアに感染したエボラウイルス病の感染拡大についてとりあげた。WHO（世界保健機関）の発表によれば、疑い患者を含めて感染者数は約28,646人、その内、死亡者数は11,323人となったと報告されている（西條 2019）。

エボラウイルス病は、1976年のザイール、スーダンにはじまり、ガボン、コンゴ民主共和国（ザイール）、ウガンダ、コンゴ共和国など中部アフリカの風土病として数年おきに流行が起きていた。しかし、2014年の流行は、その感染者数、犠牲者数とともに指数関数的な増加をしめしたことに、過去の例とは比較できない規模となった。エボラウイルス病の流行の舞台が、西アフリカの首都を含む都市であったことも大きな衝撃があった。エボラウイルス病のパンデミックが起こることが恐れられた（岡田 2015）。

エボラの最初の患者は、ギニアのリベリア、シエラレオネの国境に近いゲドゥという村に住む2歳の男の子であったと考えられている。高熱を発し、嘔吐と黒い便（血便）という症状を訴えて発症から4日後の2013年12月6日に死亡した。母親も1週間後に死亡、祖母、姉も相次いで亡くなる、村の産婆も犠牲となるという事態に展開していた。

葬儀に参列した人びとが遺体を浄めたり、別れを惜しんで触れたりしたことでエボラウイルスに感染することで二次感染し、村中に広がり、さらに近隣の村々に拡大していった（岡田 2014）。ギニア政府がWHOにエボラの発生を公式報告したのも3か月後の3月下旬になってからであった。この時点ですでに広範囲に感染が拡大しており、感染を抑える

ことができなかった。4月に事態を憂慮したWHOや国境なき医師団が支援に乗り出し、現地に医療関係者を派遣したが対応が追いつかなかった（詫摩 2020）。

2014年8月、WHOは「国際的に懸念される公衆衛生上の緊急事態」を宣言した。この時まで、ギニア、リベリア、シエラレオネ、そしてナイジェリアで1,779人がエボラウイルスに感染し、死者が961人を数えていた。国際社会でにわかに緊張が高まり始めた。さらに9月18日には国連安保理は「国際の平和と安全に対する脅威と認定した安保理決議2177を採択した。2014年11月16日までの時点のデータで、15,145人（その内、死者5,420人）まで感染拡大している。ギニア1,971人（1,192人）、リベリア7,069人（2,964人）、シエラレオネ6,073人（1,250人）、岡田晴恵はギニア、リベリア、シエラレオネの感染拡大について詳細に報告している（岡田 2014）。それぞれに終息宣言が出されたのは、ギニアでは、2015年12月19日、シエラレオネでは2015年11月7日、リベリアでは2016年1月14日となっていた。2013年末に最初の症例が確認されてから約2年が経過していた。

4.2 映像で観るエボラウイルス

本年度の授業では、視聴覚教材としてウォルフガング・ペーターソン監督の映画『アウトブレイク』（1995年）（ダスティン・ホフマン、レネ・ルッソ主演）を使用した。西アフリカのエボラウイルス感染封じ込め対策を担当した国連のデビッド・ナバロ調査官は「大惨事は映画を超越したものである」とコメントしたという（岡田 2014）。

また、NHKスペシャル『史上最悪の感染拡大 エボラ闘いの記録』（2016年2月6日放映）を使用した。シエラレオネのケマネ国立病院を舞台に二次感染につながると避けられていた定期的な点滴や検診を実施して多くの患者を救ってきたカーン医師と看護師たちの闘いの記録である。授業の最後に学生に感想をもとめたが、医師・看護師等の医療従事者の使命とは何かを問う機会となった。

5. 学生の感想（学校保健活動）

本授業に関して学生からは、以下のような感想が挙げられた。

- ・同じ地球でも文化がちがっていて、おもしろいなと思いました。
- ・発展途上国全体が地方のような環境であることをイメージしていたが、そうではなく、首都と地方での差がすごいことがわかった。
- ・水は生活するうえで欠かせないのに、水衛生が整っていないということは大問題だと思った。
- ・外国がお金や施設を提供するだけで、現地の人がそのモノの使い方などを知らないと活用できないので、改めて協力隊の技術支援などの必要性を感じました。文化や習慣が違う人たちに、病気の予防などを広めるには工夫が必要だと思いました。
- ・衛生習慣が日本と全く異なると思いました。食事の前に手洗いをしていても、その水がキレイなものでもなくては意味がないと思いました。

- ・ガーナの人々の健康への関心向上，健康増進のためにも，排泄，手洗い，感染症予防などの健康に関する指導を，正しい知識をもつ人が行う必要があると思った．
- ・健康的な生活を送るために，手洗いの方法のみを教えるだけでなく，どうして手洗いをしなければならないのか，手洗いをしないとどうなってしまうのかということ，現地の人にわかりやすく伝えなければならないと感じた．
- ・正しい知識を広げることが，とても大事だということを改めて感じました．
- ・衛生管理をしっかりとするためには，やはり，設備の充実や人々の意識が大切だと思った．
- ・普段はわからない世界の健康課題にも目を向けてみたいと思いました．

追記

本報告の執筆分担は，1, 2, 4(阿久津昌三)，3, 5(上野真理恵)である．

文献

- JICA, 2019, 青年海外協力隊のススメ 世界へススメ, JICA 青年海外協力隊, 東京
- JICA, 2020, JICA 青年海外協力隊事業概要, JICA 青年海外協力隊, 東京
- 教育出版, 2016, 中学社会 公民 ともに生きる, 教育出版, 東京
- 文部科学省, 2017a, 小学校学習指導要領 (平成 29 年告示) 解説 社会編 平成 29 年 7 月, 日本文教出版, 大阪
- 文部科学省, 2017b, 中学校学習指導要領 (平成 29 年告示) 解説 社会編 平成 29 年 7 月, 東洋館出版社, 東京
- 波平恵美子編, 2021, 文化人類学 カレッジ版 (第 4 版 第 1 刷), 医学書院, 東京
- 岡田春恵, 2015, エボラ vs 人類終わりなき戦い なぜ 21 世紀には感染症が大流行するのか, PHP 研究所, 東京
- 西條政幸, 2019, エボラウイルス病, グローバル時代のウイルス感染症 (西條政幸編), 日本医事新報社, 東京, pp.156-161
- 清水書院, 2016, 中学 公民 日本の社会と世界, 清水書院, 東京
- 詫摩佳代, 2020, 人類と病 国際政治から見る感染症と健康格差, 中央公論新社, 東京
- 帝国書院, 2016, 社会科 中学生の地理 世界の姿と日本の国土, 帝国書院, 東京
- 東京書籍, 2016a, 新編 新しい社会 地理, 東京書籍, 東京
- 東京書籍, 2016b, 新編 新しい社会 公民, 東京書籍, 東京

(2021 年 9 月 22 日 受付)